史料紹介

「豊後国諸侍着到」の復原と伝存事情

芥川龍男

はじめに

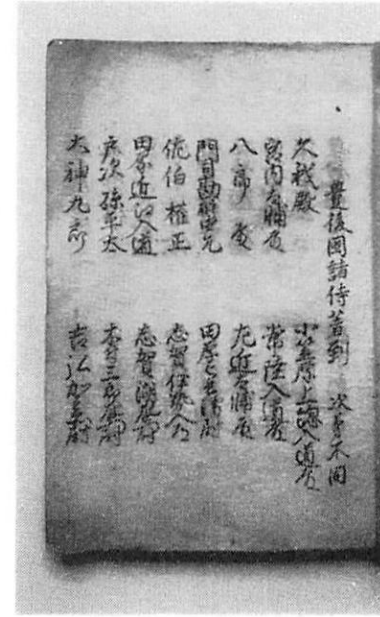
高麗陣に際しての大友吉統供奉衆の着到については、すでに点数が公刊されている。すなわち、『大友家文書録』三・四巻に収録されている「高麗陣大友吉統供奉著到衆交名」がそれである。(1) 交名の総人数は百十六人となっている。さらに「永富文書」の中に「義統豊後侍著到記」があり（以下「永富本」と称する）田北学氏によって紹介されている。(2) その末尾には「都合七百四十四人」と記されているが、七百二十一の名が見えるのみで脱落がある。田北氏は、「参考のために左に掲ぐ」と注記されている。

このように、高麗陣の着到については確実な史料を欠いているのが現状である。

さいわいにも、筆者はこれまでに二点の史料を確認することができた。その第一は、『大友家士帳』と表紙には記されているが、本文冒頭には「豊後國諸侍著到　次第不同」と記されている。第二は、表紙には『豊後國着到帳』とあり、本文冒頭は前者と同じく「豊後國諸侍着到　次第不同」とあって同文である。この二点を対比すると、記載順・記載形式は全く同様で、両者ともに写本ではあるが底本は同一のものと推定できる。さらに、分析・検討を加えた結果、「豊後国諸侍着到」の原本を復原することができた。以下において、その分析・検討内容を述べ、その復原した全貌を紹介するものである。

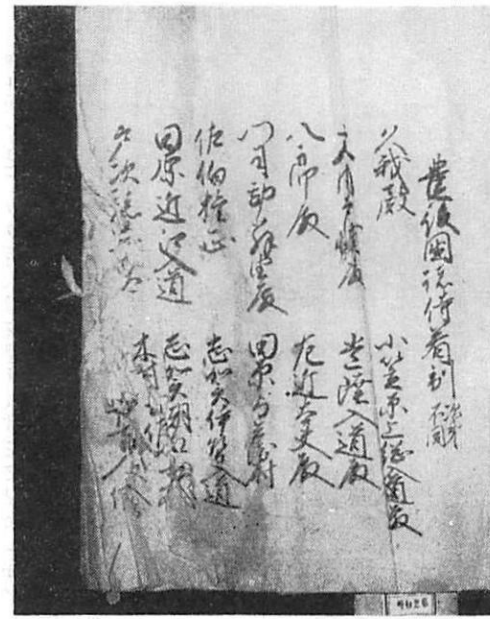
一

右にふれた第一のものは、福岡県大牟田市在住の中島輝男氏所蔵のもので、昭和四十九年十月三十一日に拝見したものである。したがって、以下においては「中島本」と称することにする。また、第二のものは、大分県日田市在住の武内俊雄氏所蔵のもので、昭和五十六年十一月二日と今夏八月二十九日に拝見したもので、「武内本」と称することにする。筆者は「中島本」調査直後に「永富本」と対比・校合の作業を



試みたが、「永富本」よりはより良質であるという認識を得た。それは、「中島本」によって「永富本」の誤写・誤記が多く発見されたことと、記載人員は七百四十一名を算出することができた。「永富本」が「部合七百四十四人」とありながら実際は七百二十一名と誤差が多いのに比して「中島本」は七百四十一名と僅差に止まっているからである。しかし、末尾に総計が記されていないことと、後記のないことなどから今日まで公表を保留せざるを得なかった。

「武内本」の調査後に「永富本」との校合を試みた結果、「永富本」よりは良質であることがわかった。「中島本」との校合によっても、「武内本」が最も良質であるといい得る根拠も把握することができた。それは末尾に記された後記によって確認することができる。後記には



右大友松野氏所蔵之秘本也、應大村源内勝安之需謄写之、

延享丁卯季冬日

財津太郎右衛門永倫

右着到人数

三百五十一人

八十五人　玖珠郡衆
三十八人　國東郡衆
百十二人　日田郡衆
二十九人　由布院衆
六十六人　戸次庄衆
十四人　高田庄衆
六人　山香郷衆
二十三人　緒方庄衆
四人　井田郷衆
十人　宇田枝衆
十七人　野津院衆

都合七百五十五人

右者、日田郡藤山村庄屋財津忠左衛門於熊本書写、予又写之、

明和元甲申初冬吉日

佐藤新七閭眞

とあり、写本ではあるがその底本は「大友松野氏所蔵之秘本」であることが明記されている。ここに見える「大友松野氏」はいうまでもなく大友義統の末子正照を始祖とするもので、肥後藩主細川氏に仕えて二千石を給され、累代当主は「松野主殿」と称している。(3) したがって「武内本」の底本は原本であるとは断定できないがそれに準ずる良本であるといえる。しかし、三回にわたる書写がなされている点に問題が残る。その三回とは、財津太郎右衛門永倫―財津忠左衛門―佐藤新七閭真と三人の手による書写であることは「武内本」の後記に記されている通りにある。したがって、誤写・脱落という問題が懸念されるのである。果せるかな、「武内本」の末尾には「都合七百五十五人」と記されていながら、実数は七百二十三人しか算定されず、三十二人の誤差つまり脱落が見られるのである。そこで、筆者は「中島本」と「武内本の校合作業をすすめた。別掲写真のごとく、両本は記載順位記載様式ともに相似形であり、欠落部分の前と後は両本とも整合するのである。さらに、三十二名分は「武内本」の記載様式に換算すれば丁度二頁分に相当する。したがって「武内本」の欠落部分三十二名を「中島本」によって補正すると「都合七百五十五人」ということになる。

以上の校合・補正によって、従来知られていた「高麗陣大友吉統供奉著到衆交名」および「永富本」より良質の史料を得たことになる。

二

ここで、前記「武内本」成立の事情についてふれておきたい。「武内本」を所蔵されている武内俊雄家は、旧日田郡十二町村庄屋の家柄で、若干の文書を伝存所蔵されているが、ここに紹介する「武内本」とともに、幸いにもその経緯を示す文書（佐藤家関係）が伝存されている。以下にこれら文書によって若干の考察を試みることにする。

まず、「武内本」の後記に見える「佐藤新七閭真」については、「童名平九郎、号佐藤九兵衛十右衛門新七。母戸田氏女。享保八癸卯三月、自大友義閭公、依先例賜一字。宝暦十庚辰八月二拾六日、大友近江守義珍公筋目之者、安否為御尋御家老篠田政右衛門武久被差遣」と「佐藤氏中興以来系圖」(4)に記載されており、この記載事項を示す「大友義閭一字書出」(5)佐藤新七閭真と篠田政右衛門相互の書簡等がそろっている。(6)これら諸文書の示すところを要約すると、佐藤家の祖は日田郡老八奉行の一人佐藤山城守鎮真で、その一族は大友氏除封後は一族浪漂し、鎮真の嫡子に至って細川家に召抱えられ、その子孫佐藤次郎兵衛は知行弐百石取となって熊本に在住し先祖代々の「数通之御感状并系図等」の本書を伝えている。このような佐藤家の庶家に当り日田に在住していたのが佐藤新七閭真ということになる。

大友氏除国の後に、細川家に召抱えられた豊後侍は相当の数にのぼると考えられる。『肥後細川家侍帳』(7)を一覧してもその氏名から充分に推察することができる。そのひとつに、すでに筆者が明らかにした財津氏一族があり、佐藤一族と同様に本家は熊本に、分家は日田に在住という型態を示している。財津氏は古代以来の日田氏に出自をもち、文安元年（一四四四）日田一族内の争いによって大友親満（永世）が名跡をついだが、それ以前に日田氏から分出して財津城主となり、以後佐藤氏とともに日田郡八奉行の中心的存在となったものである。(8)

「武内本」後記に見える「財津太郎右衛門永倫」は熊本在住、「財津忠左衛門」は日田在住であり、この頃熊本、日田双方居住の財津一族の交流は深く、この二人のほかに熊本在

住の財津永澄は世代的に一代おくれているものの財津氏および日田氏について綿密な調査をしている。特に財津永澄はしばしば日田に足を運んで永倫の旧記その他によって、『日田記』（全五巻・付録三巻）をまとめている。(9)

このような財津一族の調査活動の実績がつくった路線によって「武内本」は生れているのであるが、佐藤氏と財津氏をつないだのはこれも「武内本」後記に見える大村源内である。佐藤文書のうち後欠ではあるが「覚」によると「佐藤山城守男子孫左衛門細川家ニ被召抱、実子者彦山知楽院ヲ続々、養子八助家督相続、此子孫佐藤二郎兵衛知行弐百石、屋敷熊本坪井彼方ニ系図所持也。取持財津惣兵衛殿大村源内殿此人佐藤二郎兵衛と一家之由、本名平井」(10)とあり、文中の「一家之由」が具体的に分らないが姻戚関係によるものであろうか。これによって「武内本」後記に見える財津・大村・佐藤の関係は大略理解できるのである。さらに、「武内本」書写直後佐藤新七閤真から一族の佐藤百右衛門宛書状には、(11)「武内本」書等に戻る経緯と、佐藤本家所蔵の系図・感状等の探索についての事情が詳記されている。「大友公御惣領家松野主殿様只今平左衛門様与申候御屋舗江滞留罷在財津儀角殿知行三百石大村御知行弐千名源内殿知行弐百名右御両人御取持而ニ吟味仕候處」として、佐藤本家断絶の事情と探索の状況が述べられている。さらにこの書状の終りには、大村源内自身も、本名は平井姓であり、「清原氏玖珠十二家之内」に当り、由緒系図等を探索中であることが付記されている。なお、先にふれた『日田記』の著者財津永澄は、右に見える財津儀角（永之）から三代目に当り、先述の財津惣兵衛（永久）は儀角の父になる。(12)このように財津一族においても、その由緒に関する史料の収集に数代にわたって努力されている事情が明らかとなった。さらにこのような風潮が財津一族にとどまらず、佐藤・平井・大村氏にも見られるのみならず、豊後侍に由来をもつ細川家臣の中に一般に見られたものと思われるのである。

このような動向は、私的な一族意識によるものとはいいきれないものを含んでいるのではなかろうか。藩体制の維持とくに家臣団の把握という点からも影響なしとはいえない。戦国期から近世幕藩体制確立に至る過程には、戦国武将個々の転換のケースがあり、一応の安定を見た近世に入ってもなおかつこのような由緒・系譜探索の盛行については検討すべき多くの問題がひそんでいることを痛感するものである。この

点については、後日を期して、問題提起をしておく次第である。

稿を終るに当り、貴重な史料を所蔵されている武内俊雄氏・中島輝男氏をはじめ、紹介・協力を賜わった多数の方々に謝意を表する次第である。

註

(1) 『大友家文書録』三(『大分県史料』三三)二二四七史料。『大友家文書録』四(『大分県史料』三四)二三六三史料。

(2) 田北学編『増補訂正大友史料』二八、二七五史料。

(3) 享保八年写「御侍帳」(『肥後細川家侍帳』四、所収)。

(4)(5)(6)(10)(11) いずれも武内俊雄氏所蔵文書である。

(7) 松本寿三郎編、細川藩政史研究会。

(8) 拙稿「野上文書の伝来と移動の事情について」(「古文書研究」第一四号)。

(9) 財津永延・芥川龍男編著『日田記』(文献出版)所収。同書附録「宇佐姓日田氏財津家系図」。

附記 本稿は昭和五六年度「法政大学特別研究助成金」による成果をまとめたものである。

凡例

(1) 前掲写真に見るごとく、「武内本」は左下段部分が若干磨滅している。磨滅部分については、「永冨本」、「中島本」と校合して妥当なものをとった。

(2) (1)による判読部分は(　)を、筆者註記は該当箇所右に(　)を附して記した。

(3) 前稿でふれた脱落した三十二名については末尾に記した。

(表紙)

豊後國着到帳

豊後國諸侍着到次第不同

久我殿　小笠原上總入道殿
宮内太輔殿　常陸入道殿
(詫摩)八郎殿　左近太夫殿
門司勘解由殿　田原与兵衛尉
佐伯権正　志賀伊勢入道
田原近江入道　志賀湖左(衛門)
戸次孫(平太)　木付(三郎左衛門)」

大神九郎
鷲尾駿河守
斉藤紀伊入道
臼杵四郎左衛門尉
寒田志摩入道
奈多大膳太夫
吉岡甚幡允（杵カ）
臼木甚右衛門尉
」
雄城与三介
豊（饒カ）綏弾正忠
志賀三郎右衛門尉
田北平介
林与左衛門尉
田村作進
志賀次郎左衛門尉
平井兵（部少輔）
」
岐部（左近入道）

吉（弘加兵衛）
摂津刑（部太夫）
宗像掃部助
斎藤三左衛門尉
怒留湯長門守
本庄新左衛門尉
雄城平作（允）
一萬田二右衛門尉
」
一萬田民部少輔
山下新次郎
臼杵惣六
斎藤平内允
志賀助右衛門尉
石合右京亮
実相寺
竈（門土佐入道）
」
怒留湯（右近亮）

野上長門守
臼杵右京亮
冨来兵内允
鶴原喜助
朽網三郎右衛門尉
疋田太郎助
朽網左近太夫
」
野上相右衛門尉
田尻次郎左衛門尉
大神堅介
吉良伝右衛門尉
天徳寺小六
大津留主馬入道
大津留進左衛門尉
古庄（右馬助）
」
大津留（孫七）
葛西九郎右衛門尉

古庄丹後入（道）
小田原左京亮
竹田津志摩入道
斎藤主膳正
小原右馬助
摂津角右衛門尉
利光掃部助
」
寒田雪助
胡摩津留新助
小田原又左衛門尉
上野弥平次
高山勘左衛門尉
野上下総入道
林九左衛門尉
臼杵（隠岐入道）
」
衛藤（又左衛門）
浦上帆（右衛門尉）

疋田備前入道
吉水茂助
桜井勘右衛門尉
右田近助
馬場右近允
中村左京亮

斎藤六郎次郎
鶴原源左衛門尉
右田兵部少輔
臼杵新次郎
挟間式部少輔
吉岡三河入道
小佐井右馬助
臼杵（舎人助）

城後覚内亮
深栖大蔵少輔
志賀左近允

田北宮内少輔
岡部佐渡守
古庄甚左衛門尉
賀来中務少輔
谷川権進
大津留九郎

」

帯刀茂左衛門尉
田村新助入道
石塩九郎
吉岡孫太郎
臼杵刑部少輔
臼杵掃部助
吉岡治部少輔
若林（越後入道）

」

雄城（兵庫助）
石合五右衛門尉
山下勘解由允

成松八郎
松崎左京亮
板井相助
法花津半助
平林弾正忠

竹中宮内少輔
古庄喜右衛門尉
原田舎人允
深栖七右衛門尉
板井藤七
寺中治部少輔
古後玄番允
右田（進士允）

佐藤弥（平）
田吹与三左衛門尉
武宮武蔵守
田北治部少輔

敷戸石見守
今村又橘
竹迫越後入道
下村治部少輔
古庄志右衛門尉

」

市川宮内少輔
大津留典薬允
今村喜助
原弥右衛門尉
法花津民部少輔
宇野中務少輔
佐藤掃部助
高山隼人佐

」

森迫左馬助
斎藤治部少輔
岩屋掃部助
岐部掃部助

岐部肥後入道
木付圖書助
賀嶋織部助
高畑玄允

松岡長助
森迫右近允
丹生主計允
御手洗作蔵
妙厳寺
法花津竹寿
矢野左京亮
敷戸民（部少輔）

田村古左衛門尉
長井橘右衛門尉
下部縫殿助（郡カ）
斎藤刑部少輔
永富与右衛門尉

桝田内記允
首藤玄内允
清田作右衛門尉
斎藤善内允

京都中務少輔
朽網左馬助
志賀主水助
桜井加賀入道
九和（九品和尚）
吉田十郎
上野弥次右衛門尉
吉弘九郎左衛門尉

首藤式部少輔
斎藤権正入道
寒田長門入道
下部左近允（郡カ）
池辺弥右衛門尉

若林七郎
野上勘九郎
石合式部少輔

竹田津雅楽助
椎原掃部助
小原徳千世
波多三河入道
木付雅楽助
河辺左京亮
野上志摩守
豊繞（新内）（饒カ）

針小（四郎）
田北大炊助
服部堅吉
今河又三郎
小原兵部少輔
林明監（将カ）

深栖勘八
胡摩津留弥介
賀来兵部少輔

寒田神五郎
古庄千世徳
池辺勘九郎
田吹掃部助
臼杵亀千世
田吹市右衛門尉
木付右近允
橋爪右馬助

臼杵三右衛門尉
市河弥五郎
久保右近允
寒田宮内少輔
鶴原内記允
大津留又三郎

鶴原権允　首藤甚介入道　斎藤孫右衛門尉　石合河内入道
今村弾介　野上民部少輔　」　賀嶋兵部丞　」
長峯三右衛門尉　田北鬼若　雄城将監
高山次郎　野上作進　狭間慶右衛門尉　菅新右衛門尉
野上市右衛門入道　小佐井勘一郎　本木左馬助　伊藤八右衛門尉
大津留勘允　小佐井藤右衛門尉　青木助三　高田権内允
戸次市進　朽網左馬助　宮脇半八　斎藤源三
板井傳允　敷戸治部少輔　市河左馬助　石合五右衛門尉
廣田内右衛門尉　一萬田新介　原何右衛門尉　若林久内允
税所（助右衛門尉）　高崎隼人佐　」　今村三（右衛門尉）　成松覚進
（この部分三十二名欠落、末尾に記す）　」
薬師寺（右）京亮　成松帯刀允　板井□□介　竈門小次郎
今村兵部丞　後藤三右衛門尉　利光宮内少輔　幸弘主膳允
古庄善右衛門尉　石松相模入道　平河次右衛門尉　上尾掃部助
寒田右近太輔　上野六助　多田傳介　日差左近允
斎藤瀬右衛門尉　斎藤宮内少輔　吉良新三郎　木付弥次郎
上野与作　今村左太郎　志賀左近允　敷戸治部少輔
松岡丹後入道　龍徳彦右衛門尉　鳥羽平左衛門尉　清田味衛門尉
浦上次郎左衛門尉　楢原右京入道　」

古庄彦右衛門尉
原田勘介
幸弘右京亮
高畑主計允
原傳右衛門尉
吉弘勝右衛門尉
今村孫七郎
吉弘（八郎）

立石治部丞
戸次左介
佐藤右近允
朽網式部少輔
斎藤右京入道
仲屋石見入道
清水半内允
永松新右衛門尉
卜野七右衛門尉

清田左吉入道
廣河太吉
原田傳介
永冨九郎
小原六郎
徳丸与左衛門尉
板井帯刀允
戸次新介
」

志賀左京亮
賀来左京亮
久光主計入道
石合門介
冨来右馬助
陳与三
吉弘治部少輔
副但馬入道
」

玖珠郡衆

帆足権内允
古後久蔵
大田九郎
松木相右衛門尉
小田半左衛門尉
帆足治部少輔
森十右衛門尉

古後久左衛門尉
森掃部助
帆足大蔵少輔
帆足九左衛門尉
帆足伯耆入道
長野太郎
如法寺内蔵進
石浦壱岐守
古後八郎

森五郎左衛門尉
平井宮内入道
魚返宮内少輔
野上右京入道
森九郎左衛門尉
古後玄番允
帆足左馬入道
」

帆足兵部入道
森傳左衛門尉
帆足久七郎
山移帯刀入道
帆足勘右衛門尉
帆足右京亮
森監物允
森傳右衛門允
」

森作右衛門尉

森治部少輔　森左京亮　樹弥市郎　松木弥次郎
古後刑部丞　森又右衛門尉　野上内膳允　野上久右衛門尉
森兵部少輔　森権介　野上右近允　野上左馬助
森民部少輔　平井外記允　野上掃部助　野上美濃入道
平井市郎　平井半内允　野上刑部輔（殺あり）　中嶋雅楽助
平井大学允　平井権右衛門　小田原大膳亮　小田原進允
原口掃部助　山下勝蔵　」　」
田篭大（和入道）　平井河内入道　野上民部少輔　高勝寺
古後越中守　古後源介　小田左京亮　小田伯耆入道
志津利治部丞　長野伯耆守　田篭小左衛門尉　長野内記允
長野弾正忠　古後慶松　山下傳右衛門尉
古後慶香　古後袈裟亀　」
平井五右衛門尉　大田左馬助　国東郡衆
如法寺蔵人入道　大田河内守　眞玉太郎　冨来平作
魚返民部少輔　魚返兵部少輔　岐部平太夫　波多勘八
」　都甲八郎　古庄弥次郎
中嶋主殿助　松木右馬助　竹田津忠兵衛尉　伊美上野入道
松木掃部助　松木式部少輔　永松内蔵頭　荒木傳右衛門尉
岐部虎三　竹田津右京亮

帶刀安藝入道　岐部三橘　」

竹田津橘左衛門尉　古庄傳右衛門尉

吉弘久三　久保十右衛門尉

吉弘掃部助　姫嶋半右衛門尉

上野左介　吉弘新五郎

都甲助右衛門尉　西郡織部助

吉弘傳内允　荒木右近允

荒木三五兵衛尉　伊美勘允

吉弘弥十郎　姫嶋掃部助

」

田原進士允　久保大蔵少輔

田染式部少輔　吉弘弾正入道

田原備後守　岐部宮内左衛門尉

俣見七郎　都甲左京入道

」

日田郡衆

坂本備中入道　財津大学允

佐藤山城守　石松喜左衛門尉

羽野太郎兵衛尉　高瀬治右衛門尉

世戸口相右衛門尉　堤玄左衛門尉

師富孫右衛門尉　坂本五郎兵衛尉

坂本勘八　堀宮内丞

坂本彦右衛門尉　坂本主税助

」

坂本大膳亮　上野六右衛門尉

高瀬勘允　坂本作進

高瀬次郎右衛門尉　小野民部丞

新原治部丞　羽田弥左衛門尉

鍛冶屋右近允　坂本進士允

山部玄番入道　刄連右馬允

財津九左衛門尉　財津作進

」

星野権介　高瀬新右衛門尉

財津四郎右衛門尉　寶珠山又左衛門尉

財津平左衛門尉　財津船左衛門尉

財津甚九郎　財津与五郎

財津橘左衛門尉　財津助左衛門尉

又連紀右衛門尉
財津覚右衛門尉
平嶋内右衛門尉
財津七右衛門尉
佐藤四郎右衛門尉
羽野理右衛門尉
新原六郎右衛門尉
鬼武右京亮
堤式部丞
堤五郎右衛門尉
堤石見入道
世戸口舎人允
世戸口忠七右衛門尉
津江新左衛門尉
山部長右衛門尉
岡部又衛兵尉
鬼武甚左衛門尉

又連弥次右衛門尉
相良平内允
財津千松
佐藤主膳允
佐藤縫殿入道
羽野弾介
羽野左京亮
高瀬下野守
堤九左衛門尉
堤三橘允
堤三郎左衛門尉
世戸口民部丞
世戸口新左衛門尉
平嶋刑部丞
坂本四郎右衛門尉
新原兵部丞
平河内蔵助

坂本平左衛門尉
赤尾兵庫介
坂本藤内允
坂本藤紀允
帆足木工助
坂本膳内允
坂本次郎左衛門入道
坂本内右衛門尉
新原堅介
上野忠次郎
今井久左衛門尉
賀来市右衛門尉
坂本刑部丞
永興寺
宗永寺
三會庵
延命院

今井左馬助
坂本紀右衛門尉
坂本式部少輔
新原弾正忠
高瀬總二郎
寳珠山織部丞
小野六郎太郎
山部助允
新原主税助
坂本市右衛門尉
津江總次郎
鍛冶屋右京亮
寳珠山六進
永福田寺
宮内坊
正受院
神照寺

報恩寺　戸山　針左馬助　白仁弥介

津江掃部助　」　怒留湯左京亮　」

由布院衆　」　戸次庄衆　」

右田治部少輔　怒留湯新助　利光次郎　原孫十郎

右田左馬助　厚遠江守　今村孫次郎　帆足兵庫助

荒木右京亮　幸野又三郎　工藤弥三郎　但馬新次郎

右田刑部少輔　荒木大炊助　由布弥九郎　板井左京亮

右田大学允　右田民部少輔　佐藤千寿　板井三郎兵衛尉

右田大炊助　荒木源右衛門尉　今村市進　由布和泉入道

怒留湯中務少輔　荒木進允　由布孫次郎　池永新五郎

厚右近允　白仁刑部丞　帆足何右衛門尉　岩屋弥次郎

荒木舎人允　八坂兵部少輔　板井新介　今村帯刀允

右田勘解由允　右田源内允　上尾掃部助　佐藤式部丞

荒木源内允　八坂七郎　今村伊勢千世　板井傳進

厚蔵人助　八坂主馬允　帆足覚右衛門尉　溝部善兵衛尉

幸野外記允　荒木新介　橋本主水助　工藤六郎

板井市郎　板井右近允

原三河守
原鶴寿
今村三右衛門尉
今村千千世
高畑右馬助入道
今村左馬助
佐藤内善允
成松王松
首藤三郎右衛門尉
板井六郎
首藤弥次郎
高畑弥四郎
今村三郎
板井帯刀允
首藤市右衛門尉
清松三郎
原専右衛門尉

原治部丞
由布弾介
高畑式部丞
佐藤隼人佐
松岡幸千世
那賀大炊助
由布六郎
原勘允
首藤八郎
桑畑孫三郎
高畑主計允
首藤久介
板井刑部丞
板井玄番允
板井摂津入道
幸弘主膳允
佐藤中務允

木付又四郎
渡辺掃部助
高田庄衆
天江治右衛門尉
葛木孫八
薬師寺宮内丞
上尾式部少輔
徳丸八郎
徳丸十右衛門尉
稙田将監
山香郷衆
都甲兵部少輔
都甲治部少輔
都甲兵庫助
緒方庄衆
堀次郎

但馬兵部丞
由布藤七郎
賀嶋伊賀守
厚因幡守
能一七郎
小原新四郎
徳丸主膳丞
徳丸九郎
荒木九郎
都甲河内入道
都甲三河入道
廣瀬兵庫助
久保治部少輔

種田太郎左衛門尉　賀藤助左衛門尉　進士左京亮　高山丹波守
田尻安藝守　波多野上總助　進士平三郎　小深田志摩守
波多野宮内丞　鶴原孫十郎　衛藤三右衛門尉　進士市進
鶴原五郎太郎　衛藤源次郎　衛藤勘右衛門　首藤善三郎
衛藤雅楽助　平井弥太郎
堀式部丞　三代与一

五郎松千代　疋田伊勢熊
阿南九郎　古庄亀蔵
賀藤讃岐守　久保九郎
長野三郎　藤井佐右衛門尉
原尻藤三郎

井田郷衆

小野孫十郎　沓懸左馬亮
沓懸勘解由允　沓懸源内允

宇田枝衆

首藤次郎太良　渡辺太郎

野津院衆

木付左馬助　堀民部少輔
波津久新助　亀山玄番允
御久里源允　波津久主殿助
佐土原兵部允　廣田大膳入道
戸上五郎兵衛尉　生野九郎
廣田源五郎　亀山亀松
御久里監物允　戸上六郎

亀山右近允　亀山孫三郎
戸上左京亮

直入郷衆

丹生庄衆

臼杵庄衆
津久見衆

右大友松野氏所蔵之秘本也、
應大村源内勝安之需、謄寫之、
延享丁卯季冬日
財津太郎右衛門永倫

」

右着到人数

三百五十一人

八十五人　玖珠郡衆
三十八人　國東郡衆
百十二人　日田郡衆
二十九人　由布院衆
六十六人　戸次庄衆
十四人　高田庄衆
六人　山香郷衆
二十三人　緒方庄衆
四人　井田郷衆
十人　宇田枝衆
十七人　野津院衆
都合七百五十五人

」

右者日田郡藤山村庄屋財津忠左衛門
於熊本書写、予又写之、
明和元甲申初冬吉日
佐藤新七閤真

」

（欠落した三十二名）

由原宮師　河面勘三郎
賀来大宮司　大津留傳助
池上帶刀　木付大炊介
平井三郎跡目　朽網六進
平林新介　岡部菊松
渡部三右衛門尉　松崎弾正忠
大津留善橘　田吹藤右衛門尉
衛藤傳三郎　小田部孫三郎
廣河作右衛門尉　結城左近入道

河野傳兵衛尉　岡部宗三郎
岡部勘七　柴田三郎衛門尉
冨来雅楽介　朝倉大学
賀来将監　冨来専介
佐藤主馬允　大津留塩松
平井孫次郎（津脱カ）　平林兵部丞
竹田勘介　徳丸左馬介

（■■■■■・法政大学教授）

増訂
豊後大友氏の研究
渡辺澄夫著　■新版完成
謎の多い初代能直以来の大友氏の歴史に科学のメスを加えた初版に新たな論文を増補した著者二十余年間の研究の結晶。〈初版御購読の方は、誤植、誤脱がありましたので、無料でお取り替えします。当社までお申し出ください〉
A5・定価三、八〇〇円

源平の雄
緒方三郎惟栄
渡辺澄夫著　焔燃大明神の神裔と記された伝説的英雄惟栄を、歴史の世界に蘇生させた近来の名著。
B6・定価一、五〇〇円

第一法規　九州支社　〒810 福岡市中央区大手門3-5-4 電(092)741-6006

大分県地方叢史料書(二)
豊後国村明細帳(九)
肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか
海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録
（会員二五〇〇円　会員外三〇〇〇円）